



# 高水地協ニュース

連 合 長 野  
高水地域協議会

○ 発行責任者 荻原 公和

○ 編集責任者 岩本 淳一

〒383-0025 中野市三好町 1-1-19 Tel.0269-23-0505 Fax.0269-38-0575

## 平和集会『満蒙開拓平和記念館』見学ツアー実施

地協の平和集会は、昨年に引き続いて阿智村駒場にある満蒙開拓平和記念館を見学し、満州移民の歴史や悲惨な運命を辿った入植者の実態に触れ、あらためて平和運動の大切さを実感しました。

**実施日：9月10日(土)** 飯山市役所 7:20⇒中野市役所 7:50⇒須坂消防署 8:30 を出発し現地へ向かう。

**参加者：24名**

本誌は、連合長野の平和行動推進するに当たり、「なぜ満蒙開拓が計画されたのか」「なぜ民衆を悲劇に追いあったのか」をあらためて検証するため、2006 年に制作・放映された NHK スペシャル「満蒙開拓団はこうして送られた」を要約し掲載します。(写真はインターネットから転用させていただきました)

### 満蒙開拓団はこうして送られた

～眠っていた関東軍将校の資料～

#### ■はじめに

中国・黒竜江省、日本と中国の二つの国の人々に大きな傷跡を残した土地。かつて日本はここを「満州」と呼び、昭和 20 年までに 27 万もの開拓民を送り込んだ。「五族協和」「王道楽土」をスローガンに民族が融和する理想郷を目指した満州——。多くの日本人が夢を描いたこの土地に、終戦間際から地獄のような光景が繰り広げられた。

昭和 20 年 8 月 9 日、突然のソビエト軍侵攻で、国境近くにいた開拓民は悲惨な戦闘に巻き込まれ、集団自決・残留孤児など、戦後 61 年を経た今日に続く悲劇が生まれた。昭和の始め「満蒙」と呼ばれていた地域に、大量の開拓民を送り込む計画はどのように練られたのか、満蒙での移住地をどこにするのか、入植者をどう編成するのか、といった詳細な計画を記した膨大な資料が残されていた。

#### ■東宮鐵男とは



東宮 鐵男

資料は、関東軍将校の東宮鐵男（とうみやかねお）が作成した。まず、昭和 3 年 6 月に東宮の名を刻む「張作霖爆殺事件」が起きる。関東軍は、中国東北部を支配していた張作霖の力を排除するために殺害を計画、軍は事件直後から真相を隠蔽するものの、この事件の実行犯は独立守備隊隊長の東宮大尉で満州移民計画推進の中心人物となる。満州は日本国土の約 3 倍の面積

を持ち鉱物資源に恵まれていた。ソビエトの脅威に対する前線としても重要な地域で、東宮は満州占領が軍人としての自分の使命だと考える。東宮（生家は群馬県前橋市）の遺族は、終戦時に軍から証拠隠滅の指示はあったが、在軍時代の満州移民関連の計画書や報告書など、100 点以上の東宮鐵男の資料・行動日記を残していた。

#### ■移民計画のキッカケ

大正 9 年のシベリア出征の時、ソビエトの脅威を肌で感じた東宮は、国境警備に当たっていたコサック兵に移民計画のヒントを得ると、満州で軍人として活躍することを意識し始め、翌々年に自費で中国に留学した。昭和 2 年の日記には、コサック兵（騎馬集団）を参考にした満蒙開拓団について「余（自分）の多年の理想たる満州集団移民を実施する計画あり」と記している。

#### ■満州事変勃発と移民計画案作成

昭和 6 年 9 月 18 日、関東軍は奉天近郊の柳条湖の鉄路を爆発し満州事変が勃発する。軍は政府の不拡大方針を無視して満州の主要都市を次々と占領、満州国建国へと突き進んでいく。その時、岡山歩兵第 10 連隊にいた東宮は初めて満州移民計画案を作成し



コサック兵(置物)



柳条湖事件で満州事変勃発



軍上層部へ提出、その計画は朝鮮半島の朝鮮人を大量に入植させようというもので、日本の在郷軍人が統率するというものだ。なお、満州への移民はそれまでも試みられ、兵役を終えた兵士が開拓に挑むも、過酷な環境で事ごとく失敗に終わり、東宮も満州の環境は日本人には向かないと考えた。昭和 6 年暮れ、東宮に満州の関東軍へ再び赴任する異動発令が下された。赴任先の吉林省は満州の東端、ソビエトと国境を接し「匪賊」という武装勢力が出没する満州でも最も危険な地域の一つで、機関銃や小銃を携え、昼夜を問わず反日攻撃を繰り返す匪賊は、地域一帯に 10 万人を超えていた。東宮は、現地部隊を指導・指揮し匪賊の討伐と警戒に当たるため中国服を纏い、吉林省内をくまなく廻り地形や水利、集落位置などを調査し開拓団を何処へどの様に入植させるかの構想を練る。この精力的な作業が、困難だった開拓団派遣実現の道を開いた。

### ■満州国誕生と 5・15 事件

昭和 7 年 3 月満州国の建国が宣言。日本の傀儡国家の誕生は国際社会の厳しい非難を浴びるが、日本はこれを無視、以後孤立への道を辿る。一方、国内にあって犬養毅首相は、満州国誕生に突き進んだ軍部の動きに懸念、更に満州への移住については財政難から高橋是清蔵相が強く反対する。昭和 7 年に日本を揺るがす「5・15 事件」が勃発。青年将校たちが腐敗した政党政治を糾弾し、閣僚や元老を襲撃して犬養首相らを殺害、政党内閣は幕を閉じた。この事件を境に、軍部が政治に深く関与するようになる。

### ■加藤完治の出現

当時、移民行政を担当する省庁は「拓務省」。海軍大将・斉藤實（まこと）の内閣誕生を機に、一気に移民計画を推し進めようとし、その推進役に「加藤完治」



加藤 完治

（東京帝国大学農学部出身の研究者）に白羽の矢を立てる。彼は「農村の疲弊を満州への農業移民政策によって解決すべきだ」と主張、以後東宮と二人三脚で開拓民入植を実現していく。加藤は、自らの卒業生を朝鮮や中国東北部に移住させ、度々訓練所に皇族を招くなど、国家事業とする農業移民に没頭する。持論は「土地なき日本農民が、開拓を待つ満蒙の広い大地に行くのは当然である。それがために国と国とが戦争する場合は致し方ない」である。

### ■吉林屯墾軍機関隊編成具申書

昭和 7 年 6 月、奉天の関東軍司令部に東宮の「吉林屯墾軍機関隊編成具申書」が提出されるが、純粋な開

拓農民移住とは全く別物であった。開拓民が武装しソビエト軍の脅威を防ぐと明確に書かれ、現在駐屯している日本軍に代わり永



故郷を出発する開拓団(壮行式)

続的に防衛の任務を担うとしていた。この移民団を「屯墾軍」と名付け、詳細な組織案を作成、将校 7 人・准士官 10 人・下士官 30 人で一大隊を編成する。隊員数は朝鮮人含む 300 人とし、携帯兵器は拳銃 177 丁、機銃 33 丁に加え、迫撃砲や爆弾 100 キロ。屯墾軍は、非常時に関東軍へ編成し戦闘行為を行う。東宮の考えていた開拓団は、シベリアのコサックのような武装農民だった。

### ■東宮鐵男と加藤完治の会談

昭和 7 年 6 月 14 日、拓務省から入植地選定依頼を受けた加藤完治は奉天を訪れ、移民計画を巡って東宮と会談する。二人は 10 時間に亘って議論を闘わせたものの、朝鮮人を主体とした計画案を持つ東宮とそれに異論を唱える加藤が対立した。加藤は、内地の農民は満州の過酷な環境の下でも植民ができると主張、対して東宮は、ソビエト軍や匪賊に対する防衛部隊の役割を強く主張した。東宮の当初計画は、大量の朝鮮人を日本の在郷軍人によって統率する武装農民だったが、この会談で加藤が提案する「開拓団を日本人だけで組織する」との計画に変更。これが日本人を大量に送り込むという国策の出発点となった。

### ■第一次移民団派遣

拓務省は早速、二人の協議内容をもとに予算案を作成、8 月の臨時帝国議会において第一次試験移民 5 百人分の予算 20 万円（今の価値で約 8 億円）が賛成多数で通過し天皇もこれを裁可、こうして国の政策とする満州移民の実行が決まった。日本国内は満州建国に沸き立っていた。第一次試験移民は兵役を終えた独身の在郷軍人から募り、農作業の実習や軍事訓練を行い、10 月に 493 人を送り出す。

大連で第一次移民団を迎えた東宮は、入植予定地の吉林省北部まで引率するが、玄関口



寒さ厳しい入植地





満蒙開拓青少年義勇軍

の「佳木斯(ジャムス)」に到着したのは 10 月 14 日の夕刻、待ち受けていたのは匪賊の攻撃であった。この場は、

伊藤中尉率いる増援を

得て終息するが、開拓地で農業に励むと思っていた団員たちは、予想とは全く違う事態に困惑する。

第一次移民団の入植予定地は永豊鎮(エイホウチン)、佳木斯到着半年後ようやく先遣隊が入植地に向かう。土地の面積は凡そ一万町歩。東京山手線内側よりも広い地域に 500 人が入植、東宮は「この地域は官有地で、しかも手付かずの土地だ」と記述しているが、実態は違っていた。

### ■開墾地の買収

開拓地確保に当たっていたのは、満鉄子会社の「東亜勸業株式会社」。社員による土地買収の文書が残されており、それには「民有地三千晌のうち千五百晌は既墾地」と記されている。晌(ショウ)とは、中国東北部で使われる田畑の面積の単位で、すなわち予定地に凡そ 2,000ha の民有地はあるが、その半分は既耕作地であったという。買収額は居住者一人当たり 5 円、今の価値にして 2 万円にも満たない金で強制的に立ち退かせており、田畑を取り上げられた農民の多くが路頭に迷い、日本人の小作にならざるを得なかった人もいるなど、強引な土地の獲得は地元農民の反感を買った反日機運を高めていった。

### ■入植地の現実と移民団崩壊の危機

第一次移民団は、佳木斯到着から本格的に入植を開始した。入植地は「弥栄村(いやさかむら)」と名付けられ、家屋の建設や開墾作業が始まるが、重労働と武装勢力の襲撃に備えた極度の緊張感で団員たちの体力を奪っていった。多くの団員は病気を抱え、また精神的にも追い詰められていった。入植 3 か月後に移民団の怒りが爆発、幹部に対する激しい排斥運動が起きたのである。団員たちは拓務省に幹部総辞職勧告の決議文を提出し、入植僅か 3 か月にして移民団は崩壊の危機に直面。東宮と加藤の二人が收拾に乗り出すが、団員たちの怒りは中々収まらない。東宮は早急に状況改善することを約束し、ようやく幹部の排斥という事態は免れたものの、村内では一部の団員による家畜の強奪、無銭飲食、路上の暴行、強盗・強姦な



「屯墾病」に苦しむ開拓民

どが頻発し、事態は益々深刻になった。第一次移民団に次々と発生する問題に対して、関東軍内部では入植方法の再検討を求める声が上がりはじめた。

### ■東宮・永田の対立

移民部は、関東軍の中で移民を管理・統括する部署。この移民部が入植地を視察した時、既に 120 人の団員が病気や精神的ストレスで脱落し村を去っていた。灌漑用ポンプなど機材は古く数も足



永田 稠

りない。この年開墾した畑からの収穫はほとんどなく、中国人の耕作地が頼りであった。この視察団に、海外移住を支援する民間組織の永田稠(ながたしげし)が同行していた。永田は、南米などへの移住計画に際し、現地調査や入植準備を緻密に行い実行する移住事業家で、その経験を見込まれた人物である。永田は移民計画の杜撰さを厳しく指摘、早急に計画を改善すべきだと進言する。対して東宮は「匪賊を討伐しながら移住する状況では絶対に不可能。色々と事情があるにも関わらず、全て南米移民を基にした批判だ。満人と日本人移民との間で支配する側・



抗日ゲリラの襲撃に備えて鉄道の警備にあたる義勇隊員たち(一面境駅)

される側の関係ができるのは当然。満人は人道・王道をもたらす大和民族の大陸進出を妨害する国賊。帝国百年の移民国策の

立案に当たり、新日本建設前衛移民地に文句をつける輩は国賊である」と反論し激しく衝突。永田は「中立な支援をしようと苦言する者に“文句をつける輩”と見る目は盲目だ」と言い返し、軍移民部から去っていった。東宮の満州開拓団計画は 1 年で大きな課題を抱え、危機に直面していく。しかし、移住者の置かれている困難な現実を軍や政府はひた隠し、移民を讃える情報だけが流布され、試験移民計画は更に第二次・第三次と推進されていったのである。

### ■溥儀訪日と移民計画の拡大

昭和 10 年 4 月、満州国皇帝溥儀(ふぎ)が天皇との会談のため、日本を訪問。溥儀訪日をお膳立てした関東軍は「日満一体不可分」を内外にアピールし満州支配を更に推し進めていく。この頃東宮は、満州で加藤と会談し新たな移民計画を発案する。そこには、これまでと桁違いの入植者数と、単身者ではなく家族を送り込む新しい移住の計画が発案され





満州国皇帝・溥儀

この意見具申が、その後の満州国への大量移民に繋がっていく。

昭和 11 年、満州国の実質的支配者である関東軍は、満州国の 1 割を日本人とする「満州農業移民百万戸移住計画案」を立て、それまでの在郷軍人を募った試験移民ではなく、20 年間で 500 万人の日本国民を移住させる大規模な計画案であり、そのために満州国内に日本の耕作面積の 1.7 倍の土地を確保することが揚げられている。

## ■ 2・26 事件終結後、軍部支配は決定的に

昭和 11 年、満州移民計画に大きく影響する「2・26 事件」が勃発。この事件により、軍部の支配は決定的となり、事件後陸軍の強い影響を受け、国防の強化を唱える広田弘



叛乱軍将兵(2・26 事件)

毅内閣が誕生した。広田内閣は 8 月に「7 大國策」を提唱、ここに「20 年間で満州開拓団百万戸・500 万入植」を掲げ、その後の開拓移民の運命を決める重要国策を打ち出した。国策移民の遂行は、4 期に分け昭和 32 年まで続けるという途方もない長期計画。更に、満州へは昭和 13 年から「14 歳～19 歳まで」の少年らが編成する青少年義勇軍も含まれ、こうした大規模移民計画により、ソビエトとの国境付近に日本人が次々と移住していったのである。

## ■ 日中戦争勃発と東宮の戦死

昭和 12 年 7 月、日中戦争が勃発。日本は泥沼の戦争に突入していき、それと並行して満州への移住規模は拡大の一途を辿る。東宮は昭和 12 年 10 月に千葉部隊大隊長へ転任となり、同月中国戦線への出動命令

## <お知らせ>

### 第 5 回定期総会開催について

本年度の高水地協第 5 回定期総会を下記の通り開催致します。なお、総会代議員は「総会代議員選出基準」に則り、後日各単組へ登録依頼させていただきますのでよろしくお願い致します。また、例年同様、総会終了後に交流会開催となりますので、代議員の出席をお願い致します。

日 時：2016 年 11 月 26 日(土) 午後 3 時～  
会 場：アップルシティーなかの  
代議員数：総会代議員選出基準により概ね 80 名

が下る。出征の前日、加藤の訪問を受け「満州移民いよいよ軌道に乗りつつあり、安心して出征する」と話し、その 1 か月後に中国・浙江省の戦線で戦死する。

満州開拓の父と呼ばれた東宮の葬儀は盛大に執り行われ、葬儀の花環や弔辞の名簿には傀儡国家・満州国の経営に深く関わった人物の名が連なっていた。東宮は自らが起案した満州移民という国策の、その後を見届けずにこの世を去った。

## ■ ソビエト軍侵攻、開拓民の悲劇

東宮の死後、満州移民は国を挙げて益々大事業に発展する。百万戸計画により、全国各地から 300 を超える開拓団が入植。中には村ごと日本から移住した開拓団もあったが、満州に渡った 27 万の人々は昭和 20 年、あの悲劇の運命を迎えることになる。

4 月、ソビエトが日ソ中立条約の一方的破棄を宣言すると関東軍は、満州国の首都としていた新京以南を重要地域に指定、南部に立て籠もって銃器戦を展開する作戦を立て、よって満州北部の開拓民は見捨てられる結果となった。昭和 20 年 8 月 9 日、150 万を超えるソビエト軍が満州国境から侵攻を開始、開拓民はソビエト軍攻撃の矢面に立たされる。多くの日本人の逃げ惑う光景が満州全土で繰り広げられ、27 万開拓民の内 8 万人が日本に帰ることができなかったのである。



侵攻を開始したソビエト軍

## ■ おわりに

関東軍将校・東宮鐵男が残した満州移民計画の膨大な資料は、「一つの国策がどのように発案され破綻し、民衆を悲劇に追いあったのか——」。戦後 61 年を経た今、その事実を明らかにしている。

### 北信地区「県政対話集会」の開催について

北信地連では、小林東一郎県議会議員との協議により、県議会派(信州・新風・みらい)主催の県政対話集会を開催することと致しました。中野・下高井地域では初の開催であり、県議団との意見交換や県政状況を知る絶好の機会です。北信地連構成単組には、あらためて動員要請させていただきます。

日 時：2016 年 10 月 17 日(月) 午後 6 時～  
会 場：中野市中央公民館  
動員予定：北信地連構成単組より 80 名